

酒文化研究所

NEWS LETTER

第 42 号 2016 年 6 月 25 日

【復興支援】

立ちあがる熊本の酒

－飲んで、出かけて、熊本から買って応援

熊本地方を震央とする熊本地震は、4月14日に震度7の前震、16日の未明にはさらに大きな本震があり、その後も震度4～6の余震が頻発、熊本市から阿蘇、さらに大分にかけて甚大な被害がありました。2か月経った今も避難所での生活を余儀なくされている方が大勢います。追い打ちをかけるように6月下旬には被災地を豪雨が襲い、被害が拡大、厳しい状況が続いています。

一方で、復興に向けたたくましく前進しようとする動きも活発です。今回は被災された熊本の酒蔵・料飲店・酒販店を訪問し、現在の様子と今後を展望する声をご報告します。今後、支援の内容は震災直後の緊急サポートから、本格的な復興支援へと変わります。どのような支援が有効なのかを考える材料にいただければ幸いです。



阿蘇の山間部では斜面の崩落があちこちで発生。



益城町は家屋の倒壊などの被害が集中、今も避難所で暮らす方々が多くいる。

【お問い合わせ】 本資料に関するお問い合わせは下記まで。

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-3-14CM ビル

株式会社酒文化研究所（代表 狩野卓也）<http://www.sakebunka.co.jp/>

TEL03-3865-3010 FAX03-3865-3015

担当：山田聡昭（やまだ としあき）Eメール：yamada@sakebunka.co.jp

■ 古い酒蔵は建物・設備が損傷 県外からの支援が集まる

【赤酒の出荷を再開 瑞鷹株式会社（熊本市）】

熊本市南部の川尻地区にある酒蔵 瑞鷹（ずいよう）は、清酒と赤酒（熊本の伝統酒。味噌のような甘い酒で料理用にも広く用いられている）、そして焼酎を製造しています。明治期に創業し、熊本の酒の品質向上のために酒造研究所を設立し、技術者を招聘するなど、長く熊本の酒造業を牽引してきました。今回の地震では古い土蔵の本社屋と工場の壁・屋根が落ちるなど、大きな被害がありました。

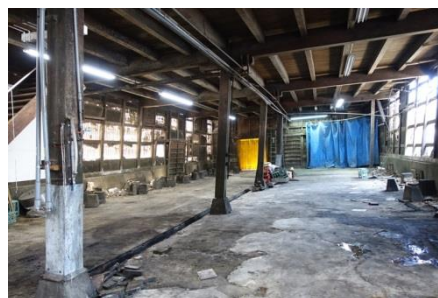
最初の地震で破損した商品を動ける社員が総出で片付け、次の出荷準備を整えたのが15日金曜日です。16日未明、そこに震度7の本震が襲い、再び商品の大部分が破損、土蔵の工場の壁と屋根は崩落し、柱と梁だけになって歪みました。タンクが傾いたり、発酵途中だったタンクに屋根からの土砂が入ったりして、数本分を破棄せざるを得ませんでした。

2か月経った今はボランティアなどの助けで建物の応急処置が済み、残った建物に設備を移動して瓶詰ラインを再稼働させ、新しい商品を出荷できる準備が整いました。赤酒をつくるメーカーは熊本県内に2社しかなく、料理に欠かせない飲食店から出荷を待つ声が殺到しましたが、ようやく応えることができるようになりました。



吉村謙太郎常務（写真上）は、震災直後から全国各地のお客さまやお取引先、同業者から励ましの声が寄せられ、東北の仲間からは貴重なアドバイスもあり、元気づけられたと言う。傷んだ建物のなかから何をどのように残していくかを検討中で、将来を見据えた設備の刷新、作業性のよいレイアウトを詰めて行きたいと。震災を会社をデザインしなおす好機と捉えて復興像を構想している様子。

写真右上は本社屋で土壁が崩れて修復工事中、2枚目が鉄筋の工場にもたれるように崩れた土蔵の貯酒庫、下は柱と梁だけになって歪んだ酒蔵。



【ぜひ阿蘇におこしく下さい！ 山村酒造合名会社（阿蘇郡）】

阿蘇の高森地区にある山村酒造（酒銘：れいざん）は土蔵の壁の一部が落ち、レンガ積み
みの煙突にひびが入りました。製品の被害は比較的軽微でしたが、タンクから発酵中の清
酒醪が流出する被害がありました。震災時には発酵途中の醪も 6 本残っており、停電で冷
やせない状態が 4 日~5 日続いたため、やむなく常温で仕上げたそうです。

県外からの注文が多く入っているものの、熊本市から阿蘇への主要幹線が通行止めのた
め阿蘇の観光客は激減、熊本市内も宴会どころではなく、熊本県内の市場の落ち込みをカ
バーできない状態が続いています。



上の写真の酒蔵は 1860 年の建造。壁の一部が落ち修復した。工場内はすっかり片
付き製造を再開しているが、この発酵タ
ンクから醪が大量に溢れた（中）、レンガ
煙突の修復工事も始まった（右）。

山村唯夫社長（右）は、いつか来る地震
ならば、穏やかな春、自宅にいる夜間だ
ったのは不幸中の幸いだったと前向き。
「旧街道で熊本から阿蘇に來られます。
雄大な景色と温泉、おいしいお酒が待つ
ています。ぜひお越しください」と。



【「くまもん」の首かけ POP で熊本県産酒をアピール】

熊本県酒造組合連合会は「がんばるけん熊本！」と復興をアピール
する首かけ POP を作成した。熊本県産の清酒や焼酎に使用され、
熊本の酒がひと目でわかるようになる。県外で盛り上がる応援の
気持ちを込めて被災地の酒を購入する動きに応えるもの。

また、熊本は「わさもん気質（他所のものをありがたがる気風）」
が強い土地柄だそうだが、震災を機に地元のものを積極的に選ぶ機
運が高まっており、この POP は県内でも活躍しそうだ。

それにしても「くまもん」という県キャラクターが育っていたのは
幸いだった。熊本産品を訴求する大きな力になっている。



■まだこれからの料飲市場 観光に行って盛り上げよう

震災直後のゴールデンウィークには、熊本県内の観光地のほとんどの施設で予約の9割以上がキャンセルとなったといえます。その後も被害の大きかった熊本市や阿蘇だけでなく、天草や山鹿でも観光客が激減、今も回復の兆しが見えません。

また、熊本市内の料飲市場は厳しい状況が続いています。震災後は仕事が終わるとまっすぐ帰宅する方が多く、職場関係の飲み会や接待はまったく戻っていないとか。県外からの支援関係者で熊本市内のホテルはとりにくいほどですが、パーティーはありません。お酒や酒器が割れたり、ビルが傷んだりして営業を再開できない料飲店が1割近くあるともいわれますが、元気に頑張っているお店もたくさんありました。

【居酒屋では熊本の酒プロモーション（酒湊 天草水産研究所）】

魚介類が売りの居酒屋「酒湊」に入ると、テーブルに熊本産の酒類をおすすめするドリンクメニューがありました。清酒のほか人吉の球磨焼酎、熊本に工場のある『サントリー ザ・プレミアム・モルツ』などです。（写真右）

【やっと客足が戻り始めました（和食「瑞恵」）】

和食「瑞恵」の女将は被災した日の様子を話してくれました。「最初の地震は営業中、瓶や皿が割れてめちゃめちゃでした。翌日の金曜は予約がすべてキャンセルになったので、片付けて店じまい、早々に帰宅しました。飲食をやっていて金曜にこんな早い時間に家にいたのは初めてです。本震でまたひどいことになりましたが、営業していなかったのだけが人もなかったのは幸いでした。電気、ガス、水道が戻って営業を再開したのは10日後です。お客さんが来ないのはわかっていたんですが、閉めていても仕方ないので……。最近になってようやく人が出るようになってきました。外に飲みに出る気分じゃなかったのもわかりますけれど、そろそろおいしい料理とお酒を楽しんで欲しいと思います」。（写真右の下2点）



【東北の仲間が駆けつけてくれて助かりました（バーブルー）】

熊本の飲食店街にある本格的なカクテルの店バーブルー。店主の吉川紗佳さんは数々のカクテルコンテストで活躍されています。震災の当日は大きな揺れで大事にしていたボトルが次々に落ちて、半分くらい割れてしまいました。「高価なボトルを上の方に、よく使うものは手前に置いていたのです。それが落ちてしまっていて、残ったのはあまり使わないお酒ばかり（笑）。今、無いボトルの注文が入ると『ごめんなさい、割れちゃいました』って許してもらっています」と吉川さん。最初の地震の後、東北大震災で被災した経験のあるパーティー仲間が、その日のうちに駆け付けてくれました。必ず余震があるから棚に戻さない方がいいと助言してくれたおかげで、本震の時にはグラスもお酒もひとつも割れなかったそうです。今は次のカクテルコンテストに向けて練習に励んでいます。



本震の時に自宅でもかかったと吉川紗佳さん。自身の後、棚にボトルの落下防止のワイヤーを張った。

■ 熊本のお酒屋さんから買ってください！

「飲んで応援」と熊本のお酒を選ぶのは取り組みやすい支援です。ただ、他県の方がメーカーから直接購入、あるいは近隣の小売店から購入したのでは、メーカーしか恩恵を受けません。小売店や料飲店などのサービス業は裾野が広く、熊本市では人口の8割が第3次産業従事者です。復興にはここにおカネが回ることが欠かせません。



川上酒店は熊本を代表する酒専門店のひとつ。川上社長は地元商店街の会長もつとめる。

熊本市内で酒販店を営む川上靖社長（川上酒店）は、支援を兼ねて熊本の品を購入していただけるなら、ぜひ、熊本の小売店からと訴えます。今後、小売店側からは、熊本の物産の頒布会のような企画が出てくることでしょうか。支援の気持ちを込めて熊本の産品を購入するなら、熊本の小売店に注文するとより効果的です。

さらに大きな支援は、熊本を旅行して、飲んで、食べて、泊まって、お土産を買うことです。今回取材で熊本を訪ねてみて、それがいちばんの支援になるのだと思いました。■